

## 2. 研究成果

### A. 計画研究

#### 課題 1

計画：1-1

ニホンザルの採食行動の群間比較

田中 香（京都大学霊長類研究所）

地域ごとの植生の違いは、ニホンザルの行動や個体群動態に大きな影響を与える。ニホンザルの採食行動の地域による違いを明らかにすることは重要である。そこで本研究では、金華山に生息する6群のうち2群を対象として、ブナの種子の採食に焦点をあて、ニホンザルの採食行動を群間で比較した。

個体追跡法により、中順位、非発情のオトナメス2頭ずつをA群、B1群から選び、行動を記録した。その結果、以下のことが明らかになった。

1) 調査期間中、ブナの種子の採食には両群とも、採食時間の約60%を費やしていた。各群のサイズはA群の方が大きい。また、調査期間中の、遊動域面積や個体の1日の移動距離に違いは認められなかった。

2) 調査期間中各群が利用した、遊動域内のブナの採食パッチ密度は、A群の遊動域の方がやや高かったが、1日に利用したパッチ数に、違いは認められなかった。また、1つのパッチあたりの利用回数はB1群の方が高かった。

3) 採食を開始した時点の採食速度は、A群の方が高かった。しかし、A群では採食時間の経過とともに、採食速度の低下が認められた。

4) 1つの採食パッチで同時に採食を行っている個体数（採食集団の大きさ）は、A群の方が、大きかった。

これらのことから、以下のことが考えられる。A群の遊動域の方がB1群の遊動域より、ブナのバッチ密度が高く、かつ各バッチの質は高い。しかしながら、A群では採食集団が大きいいため、採食速度が低下するのが早く、次々と新しいバッチを利用する方が効率的である。これに対し、B1群では、比較的質の低いバッチしかなく、バッチの密度も低いが、コストをかけて質の高いバッチを探すより、同じバッチを何度も利用した方が効率がよいことが予想される。

以上のように、金華山の隣接する2群間で、ブナの分布状況とブナの採食パッチの質および、群サイズの違いに起因すると考えられる、採食様式の違いが認められた。

今後は、さらに他地域との比較を進め、ニホンザルの採食行動と、食物の分布との関連について解析する予定である。

計画：1-2

東丹沢山塊の野生群の個体数動態

福田 史夫

東丹沢には4群が確認され、さらに10頭以下の小集団を確認した。この小集団を除いて、各群れの大きさは60頭以上であり、100頭を越える群れも存在した。20年前の調査では（川村他、1973）、この地域には少なくとも3群が存在していたが、いずれも40頭以下の小さなサイズの群れであった。

この地域におけるサルの個体数増加はどのような原因に基づくのか、まだ分析途中であるが、確実な要因として植林地の問題がある。20年前は、拡大造林によって、二次林が切り払われ、東丹沢一体の山の斜面は杉の植林となっていた。その結果、サルたちの食物宝庫であった二次林を奪われたサルたちが、急激にその個体数を減らしていた時期であった。逆にシカは個体数を増加させた。現在の植林地は、下草刈りや枝打ちなどの手入れがされていないため、サルの好物の一種であるアケビ、サルナシ、ジャケツイバラなどの蔓性大木が入り込み、さらにはそのほかの雑木まで繁茂し始めていた。

これらのことから、東丹沢のサルの個体数が増加した原因は、植林地のみにサルの食物となる二次林が入り込み、サルたちの生息地が拡大造林される前の薪炭林の状況に近くなってきているためだと考えられる。その結果食物の増加によって出産率が上がり、乳児死亡率が下がり、さらには、オスの群れ離脱年齢も遅くなっているためと考えられる。

このサルの個体数変動と全く逆の道を辿っているのはニホンジカである。

本調査では、正確な群れの、1) 性・年齢構成とサイズ、2) 行動域の大きさ、3) 植生、4) 食物、を明らかにすることはできなかった。